

『リチャード3世』再考

—女性たちの言葉をめぐって—

花 田 直 子

I

シェイクスピア (William Shakespeare) の『リチャード3世』を論じる場合、主人公リチャードのもつ強烈な個性のため、彼の性格に関心が集まる傾向にあるようだ⁽¹⁾。しかし、いくら魅力的とはいえ、リチャードも劇中人物のひとりであり、それ以外の人物も、彼とかかわりながらそれぞれの役割を果たしていることを忘れてはなるまい。

この論では、リチャード自身よりはむしろ彼と他の劇中人物とのかかわりに注目したい。リチャードとの関係において、きわめて特異な働きをしているのは、女性たちである。『リチャード3世』の中の女性たちは、リチャードを初めとする男性といろいろな意味で対照的だと言うことが出来る。このような女性たちとリチャードとの関係に焦点を当てることによって、リチャードという存在を従来とは異なった角度から捉えられるのではないだろうか。さらに、女性たちがこの劇において、究極的にどのような機能を果たしているのか考察していきたい。

『リチャード3世』には4人の女性が多く の場面に登場し、相当な量のせりふを喋る⁽²⁾。したがって、女性たちがこの劇に占める比重はかなりのものがあると言えよう⁽³⁾。彼女たちを順を追って紹介してみよう。

まず、ランカスター側の勢力者ウォリックの娘で、ヘンリー6世の皇太子エドワードと結婚したアンが現れる。彼女は王ヘンリーとエドワード王子を殺害

したりリチャードをはじめは忌み嫌うものの、次第に彼の巧みな言葉に騙され、リチャードの求婚に応じてしまう。そして彼女はリチャードの政略の犠牲となって殺される。

第二の女性はリチャードの兄エドワード王の妃となったエリザベスである。彼女は『ヘンリー6世』第3部に、子供を抱えた未亡人として初めて登場する⁽⁴⁾。エドワード王に見そめられたエリザベスは王妃となるが、貴族出身ではないことから、いつもリチャードから軽蔑されている。エドワード王の死後、彼女の王妃としての地位は絶えず王位を狙うリチャードによって脅かされ、彼女の生んだ2人の王子もリチャードに暗殺されてしまう。

もう一人は、エドワード、クラレンス、リチャード3人兄弟の母親であり、肉親の多くに先立たれ年老いたヨーク公爵夫人である。彼女は主として夫、子供、孫の死や不幸を嘆き悲しむ場面に現れる。

最後に、劇中でもっとも複雑怪奇な性質の女性として、故ヘンリー6世の王妃マーガレットが挙げられる。歴史上の事実としては、彼女は『リチャード3世』の中の出来事が起こる前に死亡している⁽⁵⁾。にもかかわらず、シェイクスピアはマーガレットをこの作品に登場させているのである。『ヘンリー6世』におけるマーガレットは、気の弱い王ヘンリーに代ってランカスター側の軍勢を率い、リチャードたちヨーク側と戦う男まさりの女性となっている。しかし彼女も戦いに破れ、リチャードたちに夫と息子を殺される。『リチャード3世』に現れるマーガレットは、武器こそ取らないが、リチャードたちに対し激しい呪いの言葉を投げかける。だが彼女は他の劇中人物から狂人扱いされ、孤立してしまう。

これら4人の女性に共通する特徴がいくつか認められる。第一に、彼女たちは夫や子供たちに依存しており、彼らが政略や戦争で殺されると、すっかり無力になってしまうのである。第二に、悲嘆にくれる女性たちの言葉に、誇張的、修辭的表現が多く見られる。このような女性の言葉については、男性の言葉との関連において、後で詳しく論じたい。そして、何よりも重要なことは、女性たちの夫や子供を殺し、女性たちと真向から対立するのはリチャードなのだと

いう事実である。

こうしてみると、劇中の女性たちは、男性に依存しており、彼らと密接な関係にある、と言うことが出来る。女性たちと男性とのつながりを検討していくと、両者の間には、行動・言語という2つの次元において際立った差異が見られるのである。

まず、行動の次元では、リチャードをはじめとする男性は、政治を行っていくうえで、活発に謀略をめぐらし、会議を開いたり戦争を始めたりする。しかし、女性はこれらの政治的要素とは全く無縁である。夫や子供が政略や戦争で殺されても、女性たちは嘆くことしか出来ない。そればかりか、女性は男性にとって好都合なように、政略の道具にされているのである。アンは、父ウォリックによってランカスター家のエドワード皇太子と結婚させられ、未亡人となった後はリチャードの策略に翻弄されて彼の野望の餌食となる。アンは、男性の政略で動かされる女性の典型である。男性との関係において見る限り、アンのような結婚を強いられる『リチャード3世』の中の女性たちには、「人間」というより「交換されるもの」という表現がふさわしいように思われる⁽⁶⁾。公の政治の場において権利を握っているのはいつも男性であり、女性は有無を言わず従わねばならない。劇中のいたるところに、このような男女の力関係の差異が見られる。

この作品において、もう1つ男女のあいだの差異を顕著なものにしているのは、両者の用いる言葉である。主として、男性は政治を進めていくうえで、簡潔かつ明瞭で、機知に富む言葉を使う。エドワード王の側近たちは、自分たちの政敵が処刑されても冗談まじりで会話を交わしている。またリチャードも、自分に逆らう者の首をはねてしまえと、例えば、

Chop off his head, man; somewhat will we do.

.....

Come, let us sup betimes, that afterwards

We may digest our complots in some form. (III. i. 193, 199-200)⁽⁷⁾

直接的で平明な表現を用いている。

しかし、男性とは違って政治とは無関係な立場に置かれた女性たちは、肉親が殺されても何の行動も取らず、ただ悲しみにふけるばかりである。エドワード王とクラレンスが死ぬと、王妃エリザベスと2人の母親である公爵夫人は、クラレンスの子供たちとともに、2人の名を呼び、嘆く。

Eliz. Ah, for my husband, for my dear lord Edward!

Children. Ah, for our father, for our dear lord Clarence!

Duch. Alas for both, both mine Edward and Clarence!

Eliz. What stay had I but Edward, and he's gone.

Children. What stay had we but Clarence, and he's gone.

Duch. What stays had I but they, and they are gone. (II. ii. 71-76)

女性たちの嘆きは、死者、失われたものに対する呼びかけであり、現実において働きかける対象が存在しないのである。死者の名の羅列から成る女性たちの言葉は、日常の言語とはほど遠い、極度に様式化されたレトリックになってしまっている。リチャードが言語を自由自在に操って思うままに劇の局面を変えていくのに比べ、女性たちにはこのようなレトリカルな言葉によって状況を打開していく能力はないようだ。

リチャードは、男性の中でも行動・言語の2つの次元において女性と対極にある存在であると言える。彼はエリザベス王妃をののしったりして、いつも女性に対する反感を露骨に示している。劇の冒頭におけるリチャードの独白も、彼のそのような側面を表しているようだ。

Now are our brows bound with victorious wreaths,

Our bruised arms hung up for monuments,

Our stern alarums chang'd to merry meetings,

Our dreadful marches to delightful measures.

Grim-visag'd War hath smooth'd his wrinkled front:

And now, instead of mounting barbed steeds

To fright the souls of fearful adversaries,

He capers nimbly in a lady's chamber,

To the lascivious pleasing of a lute. (I . i. 5-13)

リチャードは武具、駿馬など戦争にまつわる男性的なものを讚美する一方、平和な状態の音楽や踊りを女性的だとして退けているようである⁽⁸⁾。

女性を政略の道具とすることではリチャードも他の男性と同じであるが、彼の場合はことに女性蔑視が甚しい。リチャードは自分に反抗する廷臣ヘイスティングズを失脚させるため、ヘイスティングズの愛人ジェイン・ショアとエリザベス王妃が、魔法を使って自分の体を醜くしたのだと嘘をつく。

See how I am bewitch'd! Behold, mine arm
Is like a blasted sapling wither'd up!
And this is Edward's wife, that monstrous witch,
Consorted with that harlot, strumpet Shore,
That by their witchcraft thus have mark'd me. (III . iv. 68-72)

ヘイスティングズはリチャードの言うことになかなか同意しない。するとリチャードは、即座に彼を裏切者だと言って処刑してしまうのである。リチャードのせりふで、2人の女性は「魔女」、「娼婦」と、最大限に罵倒されていると言ってよい。こうして、女性はいつもリチャードの攻撃の対象となっているのである。

II

リチャードは女性と敵対するのみならず、劇が進展するにつれて、他の人間全体とも対立するようになる。その最大の原因となるのが彼の殺人行為である。リチャードは、自分が王位につくのには障害となる人物を無差別に殺していく。実の兄エドワードとクラレンスが彼の手にかかって命を失う。リチャードが過去にヘンリー6世とその王子を殺害した事実も、劇中で何度も述べられる。リチャードの存在には何か死を感じさせるものがつきまとうのである。

リチャードは、念願の王座についた後でさえ殺人を続ける。彼は兄エドワードの2人の王子が生きている間は安心出来ないという理由から、殺し屋に王子

殺しを命じる。数多いリチャードの殺人の中でも、この行為はもっとも重大なものと思なされる。犠牲となった王子たちの無垢な状態が強調され、殺し屋ですら自責の念に駆られるほどである。殺し屋のうち1人は、共犯者2人の反応を語りながら、殺人の模様を次のように告白する。

The tyrannous and bloody act is done;
The most arch deed of piteous massacre
That ever yet this land was guilty of.

.....

'A book of prayers on their (the Princes') pillow lay,
Which once,' quoth Forrest, 'almost chang'd my mind.
But O, the devil—' There the villain stopp'd,
When Dighton thus told on: 'We smothered
The most replenished sweet work of Nature,
That from the prime creation e'er she fram'd.' (IV. iii. 1-3, 14-19)

「自然がつくったもっとも完璧なもの」を殺害することは、自然の働き、ものを産み出す力を否定することになる。こうしてリチャードの王子殺しは、神の業、創造に反するとさえ考えられるのである。

殺し屋ですら自らの行為を悔いているにもかかわらず、リチャードの感情は全く動かされない。彼の関心は事の成否だけなのだ。リチャードは、以前は単なる機知に富む悪党に過ぎなかったが、王位についてこの殺人を行った時点では、冷酷でむごたらしい暴君に変わっているようである。このような王が治めるイギリスの国土は危機にさらされ、彼が引き起こす災いは、女性や子供のみならず、今や国家、国民全体にまで降りかかるようになる。リチャード自身、血のつながる者や忠実な部下まで殺してしまった結果、完全に他者から孤立してしまっている。そのうえ、彼の王座は、強力な敵対者リッチモンドが拳兵したことにより危くなる。権力の頂点について間もなくリチャードの没落が始まるのである。リチャードは味方からも見放され、リッチモンドとの戦いに破れて孤独な死をとげる。

リチャードの全生涯は次のように要約されよう。勢力を伸ばしていき、王位という権力の絶頂に達するものの、やがて孤立して力を失い、死にいたる。リチャードの栄光から没落へと向かうこの過程は、彼の性格が招いたものというより、スケープゴートとしての彼の役割を反映しているのではないかと考えられる。

ホロウェイ (John Holloway) は、シェイクスピアの悲劇をスケープゴートの概念を採り入れて解釈している⁽⁹⁾。スケープゴートの儀式に加わることによって、人々はある共同体の一員であるという感覚を体験することが出来る。演劇について言うなら、劇を見たり読んだりする者と、儀式に参加する者とは、その劇や儀式に加わっているという感じをわかち合えるのである。ホロウェイによると、スケープゴート儀式の本質は、特定の社会における悪がある個人に移され、その人間が破滅するか追放されることによって、悪が撲滅されることにある、という⁽¹⁰⁾。

こうして、『リチャード3世』のアクションから、観客や読者の視点からリチャードを一種のスケープゴートと見なすことが出来るのではないだろうか。今まで述べてきたリチャードの残虐行為から、彼が悪の力を表しており、共同体を維持するためには追放されなければならないことは明白である。リチャードが悪の力として追放された後、新しい生命力が彼が破壊した共同体に取り戻されることになる。このことは、歴史上のヨーク家とランカスター家の結合のみならず、社会全体の再生へとつながっていくのである。

III

リチャードが没落していく過程をはっきりと示しているのが、劇の4幕と5幕である。ここで彼の没落と大きくかかわっているのが、これまで彼に迫害され続けた女性たちなのである。

まず4幕1場では、アン、エリザベス、公爵夫人が連れ立って、塔に幽閉されている王子に会いに行こうとする。しかし彼女たちの願いは、王となったり

チャードの命令により拒絶され、女性たちは再び嘆き悲しむこととなる。女性の嘆きの場は劇中に頻繁に現れるが、4幕1場はこれまでのものとは異なった様相を呈する。アンがリチャードとの結婚を悔いすると、エリザベスは彼女に憐れみの言葉をかける。公爵夫人も、2人の女性を励まそうとするのである。以前、女性たちは悲しみにふけるのみで、他者の感情には無関心であった。しかしこの場面においては、女性たちの間に意志が通い合っているようである。

このような女性たちの結末は、4幕4場でもっと明確な形となって現れる。この場面の冒頭では老いたマーガレットが1人だけで姿を現し、続いてエリザベスと公爵夫人が入ってくる。2人はリチャードに王子を殺され、気も狂わんばかりの取り乱しようである。マーガレットが彼女たちに話しかけると、公爵夫人はその呼びかけに応じ、互いに夫や子供たちの死を語り始める。ここで女性たちが対立することなく、死者に対する感情をわかち合っているということは注目に値する。そしてエリザベスはマーガレットを予言者と呼び、リチャードへの憎しみから、彼女に呪いの言葉を教わろうとさえするのである。

この女性たちの行動は、劇全体のアクションからみて重要である。女性たち、すなわちランカスター家のマーガレット、ヨーク家のエリザベスと公爵夫人が、みな一体となってリチャードを呪っているのである。ヨーク家とランカスター家の結合が具体的な形を取りつつある、と言ってよい。この劇はリッチモンドが、リチャードを倒した後、ヨーク家のエリザベスの娘と結婚してヨーク家とランカスター家の合体が成立することで終わっている。この意味で、ヨーク家とランカスター家の女性たちが一致してリチャードを呪った4幕4場は、劇の結末における両家の結合の予兆となっている、と言うことが出来よう。

嘆きの場の次に、もう1つ構造上重要な場面が現れる。リチャードが登場し、エリザベスに彼女の娘との結婚を申し込むが、自分の地位を安泰にしようとする彼の政略によるものである。これに続くリチャードとエリザベスの言葉のやりとりは、1幕2場におけるリチャードのアンへの求婚と比較され、第二の求婚の場と呼ばれる。この2つの場面は、さまざまなレトリックが用いられるということでは確かに似ている。しかし、詳しく分析してみると、これらの場

面には相違点の方が多いのである。特に、第二の求婚の場では、リチャードの言葉を操る力の衰えが明らかになっているようである。

第一の場面では、リチャードは巧みに弁舌をふるい、アンを容易に口説き落とした。アンはリチャードの演技に騙され、「あなたが改心したので嬉しい」(Ⅱ. ii. 223-24)とまで言っている。しかし第二の求婚の場では、リチャードはエリザベスに訴えかけるのに多くの言葉を費さねばならない。

King Rich. Be eloquent in my behalf of her.

Eliz. An honest tale speeds best being plainly told.

K. Rich. Then plainly to her tell my loving tale.

Eliz. Plain and not honest is too harsh a style.

K. Rich. Your reasons are too shallow and too quick.

Eliz. O no, my reasons are too deep and dead:

Too deep and dead, poor infants, in their graves.

(Ⅳ. iv. 357-63)

エリザベスは、自分の娘に求婚するリチャードに自分の言葉が“quick (fast)”だと言われると、その語を“alive”の意味に取って、彼が自分の息子を殺したことにふれ、その反対の意味の“dead”で応酬する。このやりとりにおいて、このように語の意味を変えたり、地口を用いたりしてリチャードを当惑させ、優位に立っているのはエリザベスであることは注目される。

リチャードは、エリザベスが娘に手紙を書くと言って立ち去った後、自分の説得が成功したものと思込む。しかし、次の場面では、エリザベスが娘をリッチモンドに嫁がせるのに同意したというせりふがある。このエリザベスの行為については確かに曖昧なところがあり、議論が分かれている⁽¹¹⁾。だが、リチャードとのやりとりのいたるところで、エリザベスの言葉の用い方が以前よりもはるかに巧みになっていることから、彼女が二枚舌を使ってリチャードを欺いたことも十分考えられるのである。

こうして、第二の求婚の場は2つのことを示唆している。まず、リチャードが言語を支配し、状況を動かす力を失いつつあること、そして、エリザベスが

リチャードと対等にわたり合えるだけの言葉の力を身につけたことである。

エリザベスは、リチャードとのやりとりの前、嘆きの場でマーガレットと会い、彼女から呪いの言葉を教わろうとした。

Eliz. O thou, well skill'd in curses, stay awhile
and teach me how to curse mine enemies.

Marg. Forbear to sleep the nights, and fast the days;

Compare dead happiness with living woe; (IV. iv. 116–19)

マーガレットは、エリザベスに「おまえの悲しみがおまえの言葉に力を与えるだろう」(IV. iv. 125)と言って去っていく。ここから、マーガレットとの出会いが、エリザベスの言葉を鋭いものにしたのではないかと思われるのである。

マーガレットは劇に初めて現れた時、自分の仇に向かって凄まじい呪いと予言の言葉を投げかけるが、その時はみな彼女の言うことを無視する。しかし劇が展開するにつれ、マーガレットが死を予言した人物はみな、彼女が言った通りの死に方をする。エドワード王、ヘイスティングズらがそうである。マーガレットの予言が実現したのだ。彼らのほとんどが死の直前にマーガレットのことを思い出し、彼女に呼びかける。マーガレットはこの劇では2つの場面にしか登場しない。にもかかわらず、こうして彼女の名が口にされると、マーガレットが舞台のどこかに潜んでいて、劇の成行きを見守っているのではないかと感じさせるのである。

他の女性たちは夫や子供を失い、嘆くばかりであったが、マーガレットと出会ってからは、その言葉は新しい意味を帯びるようである。4幕4場で、以前イギリス王妃だったマーガレットは、もうひとりの以前のイギリス王妃エリザベスに、自分の分身を見出す。

I call'd thee then vain flourish of my fortune;
I call'd thee, then, poor shadow, painted queen,
The presentation of but what I was;
The flattering index of a direful pageant;
One heav'd a-high, to be hurl'd down below;

A mother only mock'd with two fair babes;

A dream of what thou wast; (IV. iv. 82–88)

マーガレットがエリザベスに対して言ったこのせりふは、そのまま彼女自身にも当てはまる。マーガレットが妻から母へ、そしてほとんど子のない未亡人へと移行する過程は、この劇の中で他の女性たちがみなたどらねばならない道のりである⁽¹²⁾。この意味で、マーガレットは『リチャード3世』の中の女性たちを代表する1つのタイプなのだ。マーガレット、エリザベス、公爵夫人という3人の女性の働きにほとんど相違はない。マーガレットはエリザベスに次のように言う。

Thou didst usurp my place, and dost thou not

Usurp the just proportion of my sorrow?

Now thy proud neck bears half my burden'd yoke,

From which even here I slip my weary head,

And leave the burden of it all on thee. (IV. iv. 109–113)

マーガレットがこれまで持っていた重荷を、エリザベスが彼女の代わりに負わなくてはならないのだ。この象徴的行為は、エリザベスがマーガレットの役割、すなわち鋭い呪いの言葉を発する力を引きついだことを意味すると思われる。リチャードがリッチモンドとの戦いに赴く途中、女性たちは彼に向かって戦いに破れ、死ぬようにと呪う。するとマーガレットの予言と同じように、彼女たちの呪いは現実のものとなり、リチャードは命を失う。女性たちの言葉の力が発揮されたと言えよう。

エリザベスと公爵夫人がマーガレットに会うまでは、彼女たちの言葉は打ちひしがれ、やり場のない悲しみの表現から成り立っていた。しかし、マーガレットに教えられ、リチャードに呪いの対象を見出した女性たちの言葉は、ひとつに集まって大きな声となる。このような形式的な言葉が何回も繰り返されると、儀式で用いられる呪文に似た響きを帯びるようになる。この劇における女性たちは、様式化された言語を喋るので、劇中人物というより、コーラスの声といっ

た方がふさわしいように思われる。『リチャード3世』において、女性の力は行動でなく、言語に存在するのである。

IV

従来『リチャード3世』の批評において、劇中の女性たちは十分な評価を受けていなかったようだ。ごく稀にこの劇の女性たちが論じられることはあっても、単なるリチャードの引き立て役としか見なされないのである⁽¹³⁾。

劇中の女性たちが夫や子供を殺されると、彼女たちに残されたものは、嘆き、悲しみの言葉を発することしかない。

I am not barren to bring forth complaints:
 All springs reduce their currents to mine eyes,
 That I, being govern'd by the watery moon,
 May send forth plenteous tears to drown the world. (II . ii. 67-70)

エリザベスのこのせりふからも見られるように、夫や子供を失った女性たちは不毛 (barren) となるけれども、子供でなく言語だけは産み出す力がある。極論を言えば、この劇における女性の存在価値は、言葉を喋るだけなのだ。このような女性の悲しみの言語は、男性が支配する既存の政治、社会制度を変えよう力はないようにも思われる。

しかし、以前に述べたように、王位をめぐる政争がこの劇のすべてではない。読者や観客の視点からは、劇の中心はリチャードがスケープゴートとして追放される象徴的儀式となるのではないだろうか。この劇の政治的な側面のみ注目すると、女性たちの嘆きは、日常の言葉とかけ離れた、単調で意味のない叫びとしか聞こえない。だが、『リチャード3世』を一種の儀式として読むならば、女性たちのレトリカルな言葉も、悪の追放と国家の再生、生命力の回復を願うひとつの声と化するのである。『リチャード3世』における女性の言葉は儀式的言語であり、リチャードの破滅という劇の大団円において、その機能を果た

していると言えるのである。

— 注 —

- (1) 『リチャード3世』の注釈者は、この作品の魅力が主として主人公リチャードの性格にあると一致して述べている。例えば、Antony Hammond, Introduction to *King Richard III* (London: Methuen, 1981 : E. A. J. Honigmann, Introduction to *Richard III* (Harmondsworth, England: Penguin Books, 1968) 参照。
- (2) エドワード王の愛人で後にヘイスティングズと関係を持つジェイン・ショアについてしばしば劇中で述べられるが、彼女は舞台に現れないのでここでは論じない。
- (3) Geoffrey Bullough, ed, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare III*, (London : Routledge & Kegan Paul, 1960), p. 325.
- (4) 『リチャード3世』は『ヘンリー6世』三部作の続編である。『ヘンリー6世』で描かれたばら戦争、すなわちイギリス王位をめぐるヨーク家とランカスター家の争いは、この作品で終結することになっている。ここでは『リチャード3世』を『ヘンリー6世』とは切り離して、独立した作品として扱い、先行する三部作への言及は最小限にとどめる。
- (5) Bullough, pp. 206-07.
- (6) Madonne M. Miner, "Neither mother, wife, nor England's queen," in *The Woman's Part*, ed. C. R. S. Lenz et al. (Urbana : Univ. of Illinois Press, 1980), p. 45
- (7) 作品からの引用はすべて Antony Hammond, ed, *King Richard III* (London: Methuen, 1981) による。
- (8) Miner, pp. 36-37
- (9) John Holloway, *The Story of the Night* (London: Routledge & Kegan Paul, 1961) .

- (10) Holloway, p. 141
- (11) 一例を挙げると、E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays* (London: Chatto & Windus, 1944) では、エリザベスが一度は説得を受け入れたが後で心変わりした、と考えられている。また一方で、Honigmannらはエリザベスが故意にリチャードを欺いた、と見なしている。
- (12) Miner, p. 45
- (13) Wolfgang Clemen, *A Commentary on Shakespeare's Richard III* (London: Methuen, 1968); M. M. Reese, *The Cease of Majesty* (London: Arnold, 1961) などの『リチャード3世』における女性の扱い方にこの傾向が強い。